東海大学資格教育研究
第 4 号
DOI: 10.18995/24367664.4.65

〈展覧会評〉

特別展「吟遊詩人の世界」を観て
瞽女―見えない世界からのメッセージ



会期：2024 年 9 月 19 日（木）～12 月 10 日（火）
会場：国立民族学博物館　特別展示館

2024 年秋、「みんぱく」の愛称で知られる国立民族学博物館（大阪府吹田市）でみんぱく創設 50 周年記念特別展「吟遊詩人の世界」が開催された。

図録には「世界各地で、今も、人びとの暮らす家から家へと、あるいは村から村へと巡り歩き、詩歌を歌い語る吟遊詩人の姿が確認できます。彼ら彼女らの歌と語りが辺りに響くとき、世界はそれまでとはまったく異なる相貌をもって人びとの前に立ち現れてきます。そのような吟遊詩人の歌と語りを、この特別展では、世界を『異化』する存在として捉えています」とあり、続けて「この展示では、また、人類学者の手による、そうした映像記録の製作のあり方にも、省察的なまなざしが向けられています。その結果、この特別展は、みんぱくが過去 50 年を費やして世界各地で継続してきたフィールドワークを、『吟遊詩人』という共通項の下で、いわば切開して比べてみせる試みにもなっています」と同展に込めた想いも寄せられている。

展示構成は、円形の 1 階展示場中央から放射状に 8 つのセクションが設けられ、以下のフィールドの吟遊詩人の諸相と地域社会が紹介された。

- エチオピア高原の吟遊詩人
- タール砂漠の芸能世界（インド）
- ベンガルの吟遊行者と絵語り（インド、バングラディシュ）
- ネパールの旅する楽師
- 瞽女―見えない世界からのメッセージ（日本）
- うたが生まれる心の小道（日本）
- モンゴル高原、韻踏む詩人たちの系譜
- マリ帝国の歴史を伝える語り部

みんぱく創設 50 周年記念に相応しく同館の教授陣 5 名を含む 8 名の研究者が、8 つのフィールドそれぞれの土地の歴史と環境に育まれた個性豊かな吟遊詩人のありようを伝えている。

2 階展示場は、研究の舞台裏を紹介する「研究者のまなざし」や通文化的な視点から「ポピュラー音楽と吟遊詩人」「韻と抑揚、イメージの深淵」と題するコーナ展示で、人類学者のフィールドワークの様子や彼、彼女らの調査研究に対する熱い想いなどが伝わってくる。また、時代の変遷のなかで吟遊詩人がさまざまな社会的役割を担ってきたこと、その多くが地域社会において、時には畏怖の対象とされ、時には社会的周縁に追いやられてきたことなどが通文化的な視点から読み解かれた。吟遊詩人を継承するモンゴル・ラッパーなど、社会批判する現代の詩人たちも紹介された。専門外とはいえ、若い頃、ファッションの一環としてジャック・ケルアック『路上』などのビートニクに憧れた世代にとって、モンゴル・ラッパーの存在は衝撃的であった。

ところで、近年、ミュージアムの業界では博物館 DX といった言葉をよく耳にする。街中でもイマーシブミュージアムなる展覧会が話題になっている。イマーシブ（immersive）は「没入感のある」とか「没入型の」といった意味で、例えば、印象派や浮世絵の作品やアーティストの人生を、臨場感溢れる映像や音楽で体感できる展覧会である。

こうした展覧会が従来のミュージアムのそれとは全く異なる世界線を思い描こうとしているのを承知の上でいうならば、本展は、モニターなどの映像機器を多用しているという意味で、古典的手法による博物館展示であったと評することも可能だ。しかし、決定的な違いは、フィールドワークの質と量、それらの蓄積にある。映像記録や写真、資料それ自体が語りかけてくる圧倒的なリアリティにある。それらのクオリティの高さと膨大な量において、いまのところイマーシブミュージアムはこれに太刀打ちできるだけの要件を備えてはいない。

イマーシブミュージアムとは異なる意味で「没入型」展示を成り立たせていたセクションもある。「瞽女―見えない世界からのメッセージ（日本）」である。

瞽女（ごぜ）は室町時代の史料に登場し、江戸時代には全国各地で活躍した旅芸人で、三味線を奏で独特の節回しで語る瞽女唄は娯楽の少ない農村の人びとを楽しませた。山間部の農村などを歩いて回った彼女らは盲目の旅芸人である。だから彼女らが生きた世界を私たちが追体験するのは難しい。私たちの大多数が視覚優位の世界に生きているからだ。映像や写真などを多用した本展の他の 7 つのセクションも、展示手法としての共通言語は「視覚」中心であったといえる。

他方、「触覚」と「聴覚」に重きを置き、「さわる」と「きく」に来場者の関心を惹きつけようとしたのが瞽女のセクションである。途絶えてしまった瞽女文化の豊かさを追体験してもらうべく、展示担当者は「サウンド・スケープ」ならぬ「サウンド・スケール」という新たな概念も提唱しているが、詳細は図録論文に譲ることとし、ここでは展示冒頭の「じっくり聴いて、しっかりさわる」と題するメッセージを紹介したい。

「瞽女は音と声の世界に生きていた。本セクションでは「歩く」「創る」「伝える」の三つのコーナーに対応する『声による解説』（語り：広瀬浩二郎）を設置している。音と声で自分たちが生きている世界を把握するとともに、村人たちが生きていく世界を指し示す。そんな瞽女の豊かな聴覚世界を追体験しよう。なお、本セクションでは、手が届く範囲の展示史料にさわることができる（マネキンは除く）。さわるとは者と物がつながること。触覚への気づきを促すために、各解説パネルの情報は、表音文字である点字でも提供する」。

視覚以外で瞽女の存在を感じられるように工夫した点が「みる」展示を「没入型」のそれへと転化したようだ。例えば、「歩く」のコーナーでは、彼女たちが持ち歩いた枕や草履などに触ることができる。衣類から布団まで必要なものはすべて担いで農村を回ったのは、優しく接してくれる村人たちへの彼女たちなりの気配りだろう。今でいう合理的配慮である。村人たちから御礼として受け取る米の重さを体験できる米袋の展示もある。3 人の瞽女が 1 回の門付けで 6 軒の家を訪ね、茶碗や湯呑みに入れた米を 1 合ずつもらうと 18 合（2.7kg）になる。あとで買い戻されるその米は「瞽女の百人米」と呼ばれて珍重された。

「創る」のコーナーには無形文化財保持者の指定を受けた 3 人の「語り」による瞽女唄の聴き比べの展示もある。展示セクションの配置が功を奏して階段下の暗い空間に映像が投影され、指向性スピーカから瞽女唄が聞こえてくる。用意されたベンチに座って目を閉じ、じっくり聴いてみる。バラエティに富む瞽女唄の魅力を肌で感じることができる。同コーナーの「声による解説」が位置的に若干漏れ聞こえてはくるが、そもそも日々の暮らしの雑音のなかで瞽女唄が聴かれていたことを想うと、そう気にもならなくなる。

再び「瞽女の百人米」を持ち上げてみる。「声による解説」が一旦途切れるタイミングで背後から瞽女唄が聞こえる。目を閉じると、ずっしりとした米袋の重さが両手の中に確かにある。村人たちと瞽女さんたちの相互扶助による温かい交流の様子が偲ばれ、長岡瞽女や高田瞽女が生きた世界にタイムスリップした気になる。プロジェクションマッピングやインタラクティブなデジタルツールがなくとも「没入型」展示は可能だ。古典的な博物館展示でも、来場者が展示の琴線に触れることができさえすればそれは成り立つ。「琴線」はみんなちがって、みんないい。その意味でもイマーシブミュージアムとは一線を画す「没入型」である。

村人たちは幸せだったろう。娯楽の少ない山間部の農村の日常は、瞽女さんたちが奏でる三味線の音色と唄に誘われ、一瞬のうちに別の世界線に惹き込まれていったことだろう。世界を異化する吟遊詩人である。「頑張っている人、かわいそうな人」という「けなげ」で「気の毒」な瞽女のイメージは、稀代のエンターテイナーに取って代わるわけだが、それでも健常者と呼ばれる私たちは、彼女らを含むマイノリティがなぜ社会的周縁に追いやられてしまったのか、しまうのかについて、問い続けていかなければならない。

最後の「伝える」のコーナーは現代美術とのフュージョンである。《わたしのおへそのうちとそと》と題するテラコッタの彫刻が展示された。瞽女をまったく知らない世代の若手アーティスト・ナギソラさんは、へその哀れさを下ネタも交えて面白おかしく唄う瞽女唄「へそ穴口説き」に着想を得て制作したという。

しっかりさわる。テラコッタ特有の微細な粒子のザラつきが手にまとわりつく。押し寄せる波が繰り返し波打ち際で重なるように、そのザラザラとした感触と、丸みを帯びた流線型のフォルムが紡ぎだす触感とが手のひらのなかで同時進行的に重なり合う。その心地よさが永遠に続くような経験は、触覚にとって「美」とは何かを考えるヒントを私に与えてくれた。

（評者：篠原 聰）